

Spine Dynamics 学術シンポジウム 2018 ルポ



集まれ全国のセラピストの仲間たち
新しい治療概念でパラダイムシフトを
相互啓発でさらに理解を深めよう

故脇元幸一先生が Spine Dynamics 療法を提唱してどれぐらいの年月が過ぎたのでしょうか。日本における理学療法誕生の 50 年から考えれば、まだ歴史は浅いかもかもしれません。しかし、理学療法誕生から 50 年の変革と、脇元先生が Spine Dynamics 療法を提唱してからの変革では、Spine Dynamics 療法を実践されている方々にとってその速度の違いは身をもって実感されているのではないのでしょうか。

疾患が結果であるならばそこには必ず原因があるように、疾患が良くなるのも結果であり、そこには必ず理由があります。今年は例年以上に全国の Spine Dynamics 療法セラピストから疾患が良くなる理由が多く報告されましたので、興味深い内容をいくつかご紹介します。

【研究発表：WBI・筋緊張・柔性】7 題

運動耐容能は「身体運動負荷に耐えられるために必要な、呼吸や心血管系の能力に関する機能」であるということ。つまり、ヒトが地球上で活動するためには必須であり、運動耐容能は上位胸椎が関与するという結果が報告されました。上位胸椎＝自律神経が関与すると同時に、脇元先生がもっとも伝えたかったヒトの生き方が関与すると捉えることができます。心と体の繋がりがこのようにして証明されていくのだと実感することができました。



【経験発表：介入】8 題

近年注目されるウイメンズのリハ、セラピストが活躍出来る場が徐々に広がっていると同時に、我々には様々な対応が求められています。妊婦の症状は不定愁訴的な主訴も多く、仕方ないといった対応、何かあったら困るから無理はしないような対応、症状という結果に対して対処療法的な対応などが実情だと思います。では、妊婦で不定愁訴的な症状を訴えるヒトと訴えないヒトの違いは何なのでしょう。今回の報告では、妊娠前の身体環境を整えることの重要性が提言され

ました。妊婦に限らず「そもそも」という着眼点こそが **Spine Dynamics** 療法の醍醐味です。症状が出てからではなく、症状がでるまえの段階、つまり未病の段階での介入が根本的な治療であることを示して頂けたと思います。



【研究発表：胸郭・身体機能】7題

今年も福岡リハビリテーション専門学校から「性格と身体機能の関係性」という大変興味深い演題が発表されました。今回の結果は、性格と **WBI** には関係性があり、そして消極的な性格は **WBI** が低値を示すということ。私の **WBI** が徐々に低下を示しているのは、私の消極的な性格が影響しているという原因を知ることができた発表であったと思います。



【研究発表：運動療法】7題

このセッションでは運動療法について発表がなされました。重力場でヒトという物質が活動するためには、筋の作用無しに活動を行なう事は出来ません。そして、筋の作用を高めるに運動療法は必須であり、そこにも様々な手法と成果が求められます。実践によって得られた今回の発表結果は、参加された方々にとって大変有益な情報であったと思います。

【経験発表：症例】8題

シンポジウムは今年で4回目となりますが、ついに待ち望んだ発表が行なわれました。それは、自身の仮説が上手くいかなかった症例です。セラピストは骨・関節のスペシャリストであり、運動学・生体力学を駆使して患者の症状に対峙します。しかし、原因が他にある場合にはその症状は緩解が得られず、スペシャリストであるが故に機能障害という問題点ばかりに着目してしまい、他の原因を追及出来ないということが危惧されます。人は、成功体験よりも失敗から学ぶことが多く、そして同じ失敗を繰り返さないことが患者ファーストであるといっても過言ではありません。それを **Spine Dynamics** 療法でつながった仲間と共有することができた発表でした。



【研究発表：脊柱・リサーチ】7題

患者と対峙する際、患者の主訴に対して応えたいと思うことはセラピストとして当然であり、そこで第一選択されるのは徒手療法になります。徒手療法における刺激量検証の報告では、徒手療法実施時の棘突起距離の変化は弱刺激<適刺激=強刺激であり、柔軟性の改善は適刺激>強刺激で有意な変化を示すという結果でした。つまり、適刺激が最も効果が高いということを表しています。もし患者の主訴に対して応えられなかったとしたら、自身の徒手療法が本来の目的を達成するものであったのかと今一度立ち返る必要があるかと実感しました。Spine Dynamics 療法における徒手療法は治療手技ではなく、自身の仮説検証の為の術であり、そして患者さんの行動変容に繋げるツールであることを改めて実感しました。

～脇元幸一先生の想い～

あのでかい体、屈託のない笑顔、食に対する執着心（笑）、いろんな印象や思い出があるかと思いますが、ヒトの体を一瞬で変化させるあの技術は皆さんも驚かれたことかと思えます。その背景にあるのは圧倒的な知識もそうですが、一番は探究心であり、日々疑問を持ちながら検証を続けることでその生涯を終わられました。皆さんは、脇元幸一先生の講義を受けてすごいと感じる反面、そうなんだと納得するしかなかった事もあるかと思えます。それこそが私どもに残した宿題であるのではないのでしょうか。自分のインスピレーションを信じ、ちょっとした勇気をもって実践すること。そして、そこで生まれた疑問を検証し続けることが、Spine Dynamics 療法の神髄であるといっても過言ではありません。

回数を重ねるごとに着眼点も研究の手法もたいへんレベルが上がってきています。第5回目となる来年は東京での開催です。脇元幸一先生の「想い」に応え、私たちでSpine Dynamics 療法を作りあげるべく皆様の発表ならびに参加を期待します。

では、また来年！

嵩下敏文（株式会社 創生）